プレゼント

Ｒａｙ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プレゼント

【Ｎコード】

Ｎ１３８１Ｄ

【作者名】

Ｒａｙ

【あらすじ】

キャバ嬢とホストの切なすぎるラブストーリーです。

「おぅ！また来たか」
「おぅ！また来たよ」
アタシ、唯は大学に通いながらバイトでキャバ嬢してる。
好きな人は5日前に出会ったホストのあっちゃん。
それから毎晩通っている。
「ボトルなくなるけどどうする？」
「あっちゃん好きなの入れていいよ」
キャバ嬢やって半年、運良くずっとＮｏ．１。特に使い道がなかったから、お金ならある。
それでもあっちゃんが持ってくるボトルはいつも3万円の安いブランデー。
「なんでまたこれ？もっと高いのにすればいいじゃん」
「お前さぁ、自分で頑張って稼いだ金なんだから自分の為に使えよ」
「分かった。じゃあピンドン飲みたい！」
「またすぐそうゆうこと言う。いいからおとなしくしてろ」
あっちゃんは唯にお金使われたくないみたい。それとも作戦？
「分かった！！何か欲しいものでもあるんでしょ～？」
「そんなの自分で買うし」
唯があっちゃんに出来ることは毎晩お店に通って、お金使って、いいお客になること。それしかない。これじゃあいいお客になれないよ。
しょんぼりする唯を見てあっちゃんは困ってる。
「お前はなんでそんなに使いたいわけ？」
「あっちゃんが喜んでくれると思ったから」
「じゃあさ、明日店休みだからどっか行こうか？」
「ヤダ、行かない。お客はホストのプライベートに入り込んじゃダメなんだもん。それに日曜は毎週実家に帰って仕事手伝うって言っ

てたじゃん」

毎週実家に帰ってるってゆうのはお客に誘わせない為の、誘われても断る為の口実だってのは分かってる。
ホントは彼女とゆっくり過ごしてるのかもしれない。でもそんなことは唯が知る必要はない。だって唯はあっちゃんの一番のお客になるんだから…
「お前ホント変わり者だよな。外で会いたいとか思わないわけ？」
「同伴ならいいよ」
「ハァ…　わかったよ。じゃあいつにする？」
「明日はお休みでしょ？だから明後日がいい」
「じゃあ夕方ＴＥＬする」
「うん！」

「お前さぁ、俺より他の奴等と話してる方が楽しそうじゃね？」
同伴の約束をした後他のテーブルを回っていたあっちゃんが戻って来た。
「えへっ。だって皆カッコイイし優しいし面白いんだもん」
それは本当。だけど楽しく話すのはあっちゃんがいいお客持ってるって皆に思ってもらいたいから。

「歌舞伎町Ｎｏ．１美女、唯さんからドンペリピンク頂きましたぁ！！」
突然のドンペリコールにあっちゃんはビックリしてる。
「飲も！！」
「……　まいっか」

閉店の時間になった。
「車回して来るからちょっと待ってて」
「えっ！？」
「今日は送らせてよ」
「タクシー拾うから大丈夫」
「いいから、ピンドンのお礼」
初めてあっちゃんと2人っきりになって、唯は嬉しくて仕方なかった。
唯のマンションの前に着くと、あっちゃんも車を降りて唯の部屋に入って来た。「へぇ～、こんなとこ住んでんだ」
「あっちゃんのお家に比べたらマッチ箱でしょ？」
あっちゃんはコーヒー一杯と唯の即席朝ご飯を食べて帰った。

日曜は学校も唯のお店もあっちゃんのお店もお休み。
会いたいな…
今頃何してるのかな？
プルルルッ
あっちゃんのＴＥＬはいつもタイミングがいい。
「ほいほ～い」
「なんでお前はいつもそんな元気なんだよ」
それから唯とあっちゃんは3時間以上話していた。
あっちゃんは今実家にいて明日の夜戻って来るらしい。
正直そんなのは信じてない。あっちゃんはきっと今も東京にいる。
でもそんなことは絶対口にしちゃいけない。あっちゃんを困らせたくない。嫌われたくない。だから唯は黙って聞いてる。あっちゃんはきっとそんな唯に気付いている。だけど唯が何も言わないからあっちゃんも何も言わない。
唯はお客だからあっちゃんのプライベートは、何も知らない方がい

い。興味がないフリをする。だからあっちゃんも唯のプライベートは何も聞いて来ない。
それは目には見えない境界線で、それが唯には必要だった。それがないといつ暴走するか分からなかったから。

同伴の約束をした月曜日、唯が学校から自分の働くお店へ向かっているとあっちゃんからＴＥＬがあった。
「今日どうする？俺今こっち戻って来たとこだからこのままそっち行っていい？」
「なんで？唯今からお仕事だよ」
「はぁ？今日同伴すんだろ？」
「うん！同伴だと３時までにお店入ればいいんでしょ？だから１０分前くらいにお店の前で待ち合わせにしようよ。」
唯は外であっちゃんに会うつもりはない。例えそれが同伴やアフターでも…
あっちゃんは本当かどうか分からないけど昼間も働いているらしい。本当ならあっちゃんはすっごく疲れてると思った。だから唯はあっちゃんにゆっくり休んでほしかった。「もしかしてお前ハナッから同伴する気なかったわけ？」
「いいからいいから。唯もうお店着くから一回切るよ」
あっちゃんは唯に呆れてた。それが分かったから言い訳をするより早く切った方がいいと思った。

店内が徐々に埋まり始めたころ、また
「いらっしゃいませ」の声が聞こえ、指名客についていた唯は呼ばれた。
「１２番テーブル新規１名様ご指名です。」
そう言われた先を見るとそこにいたのはあっちゃんだった。

「どうしたの！？」
「同伴の約束したじゃん。仕事なんだったらここで同伴しようかと思って」
「でもあっちゃんキャバクラ似合わないよ」
「似合ってたまるか」
唯はなんだか照れくさかった。そして多分あっちゃんも…
「ここって何時まで？」
「２時だよ。」
「じゃあラストまでいるからその後一緒に行こうか？」
唯はずっとあっちゃんの席にいたかったけどそんなわけにもいかず、あっちゃんが来てくれてから閉店までの３時間半、結局あっちゃんと話せたのは３０分くらいだけだった…

「さすがＮｏ．１。ダテじゃないね」
「そんなのいいよ…」
唯はあっちゃんに見られたくなかった。お客に貢がれたり、酔ったふりをしたり…　そうゆう女を武器にしてるのを見られるのは本当にイヤだった。だけど…
「来てくれてありがとう。嬉しかったよ」
そう言うしかなかった。

その夜、唯はあっちゃんのお店で何に対してか分からないモヤモヤの中やけ酒をしてしまった。
「ねぇ光くん、唯ウザ客かなぁ」
唯はあっちゃんが他を回っているとき、あっちゃんと仲良しの後輩光くんにグチっていた。
「唯ちゃんがそんな酔ってるのめずらしいね。篤司さんもなんか今

日おかしいし、なんかあった？同伴中ケンカでもしたの？」
「何もないよ。たださ、どうしたら唯はあっちゃんの１番のお客になれるのかなって思ってさぁ」
「唯ちゃんは可愛いし、俺らともすっごい気さくに話してくれるし、十分じゃん。篤司さんも唯ちゃんが来てくれるようになってから嬉しそうだよ」
唯はなんでかわからないけど泣きそうだった。
光くんがそれに気付いたのか、ふと席を立ちあっちゃんのとこへ行き、何か耳打ちしてる。おそらくそろそろ帰した方が…　って言ってるんだと思う。
そしてすぐにあっちゃんが来た。
「どうした？」
「おかえり。今日はゴールドいっちゃう？」
元気に言ったつもりが目からは涙がボロボロ溢れてきた。
「なんだこれ。ゴメン」
それでもこの上ないくらい元気に言って唯はトイレに逃げた。
ホントなんだこれ。これじゃあウザ客間違いないじゃん。

「今日はとりあえず帰れ」そう言われるのを覚悟で、でも何食わぬ顔で席に戻るとあっちゃんも何食わぬ顔で迎えてくれる。
「今日ラストまでいれる？ちょっとどっか行かない？」
「ラストまではもちろん居座るけど、あっちゃん仕事だし、唯も学校あるし無理だよ。」「ちょっとでいいから」
「ダ～メ！！」
「お前さぁ、いつになったら俺の言うこと聞くようになるわけ？」
「ホストの言うこと黙って聞くなんて、Ｎｏ．１キャバ嬢の名が廃るわ」
唯はこうゆうのがいい。お互いのテリトリーには入らない。この関係がいい。それがホストとお客の一番いい関係だと思う。

あっちゃんはまたしばらくして席を離れた。そして、心配顔の光くんがやってきた。
「唯ちゃんさぁ、もう少し篤司さんの気持ち考えてよぉ」
「なんで？だって唯はお客様です！お客様は神様です！きゃははっ」
「すっかり元気になってる…　唯ちゃんホント可愛いよねぇ。そりゃ篤司さんも…」
「へっ？なになに？光くん、唯に惚れちゃった？ダメだよ。唯は誰のものにもならないから」
「篤司さんでも？」
「そう。あっちゃんが唯のものになることはあっても唯があっちゃんのものになることはないよ」
「その言葉そっくりそのままお前に返すわ」
地獄耳のあっちゃんがそれだけ言う為に来て、それだけ言っていなくなった。
「篤司さんと唯ちゃんは似たもの同士だね」
「そうかなぁ。」

「そうだろ。お前のこと一番理解出来るのは俺。
俺のこと一番理解出来るのもお前」
あっちゃんが唯の隣りに座りながらそう言った。
「か～っこい～！！」
光くんがあっちゃんに握手を求めた。
「でもマジで俺はそう思うけど？」
「…オイっ！なんか言えって」
正直感動した。いつもの感じで返さなきゃならないのは分かってる。けど本気で感動した。このまま死んでもいいとさえ思った。
それから1ヵ月。唯は毎日は行けなかったけど、週４以上はあっちゃんのお店へ通った。あっちゃんは必ず1日5回以上はＴＥＬをくれる。唯とあっちゃんは昔から友達だったみたいに、何時間でも話していられた。

あっちゃんと出会って1ヵ月と3日たった今日はX'ｍａｓイヴ。
街中がカップルで溢れている。今日と明日はあっちゃんのお店には行かないって決めている。X'ｍａｓはやっぱり好きな人と一緒にいたいって思うけど、X'ｍａｓにホストに行くってゆうのはさすがにプライドが許さない。
あっちゃんもそれを分かってか何も言ってこない。

そしてX'ｍａｓが終わった26日、唯はあっちゃんに会いに行くのを楽しみにしていた。だけどなんだか朝からものすごい寒気とだるさに襲われていた。
なんとか学校には行き、仕事に向かった。
お店に着くと、店長が唯の異変に気付いたみたいで、今日は指名客だけ相手するように言われた。
なんとか頑張っているつもりだったが12時を回った頃、唯は自力で歩くこともままならなくなり、意識が遠のく中早退した。
家に着くとそのままベットに倒れ込んだ…

それからどれ位眠っていたかわからないが、携帯の着信音で目が覚めた。
携帯を見ると、あっちゃんからだった。
「もしもし？」
「どうした？具合悪いのか？」
平然を装って出たつもりだったが、またあっちゃんには通用しなかった。
「うん…　行けなくてゴメンね。明日はきっと行けるから…」

「大丈夫か？熱は？飯食った？」
いつになく優しいあっちゃんに喜ぶ元気もなく、どんどん意識が遠のいていく…。
「今行くから待ってろよ」

あっちゃんが来てくれる…　メイク直さなきゃ…　髪もちゃんとして…　だけど体は動かない。
その時チャイムが鳴った。

鍵開けなきゃ。
立ち上がることは出来ない。
なんとか玄関まで這うようにして行き、鍵を開けると、本当にあっちゃんが来てくれた。
あっちゃんは唯のおでこを触ると、焦ったような顔をして、唯をベットまで抱き抱えて行った。
「熱計った？」
「まだ…　ただ寝てただけ」
あっちゃんは救急箱を見つけて体温計を出して熱を計ってくれた。
４１．６℃もあった。唯は笑ってしまった。
「笑えないって。頭おかしくなったんじゃないだろうな」
あっちゃんは本気で焦ってるみたい。
「病院行こうか？」
「無理。動けない」
「俺が連れてってやるって」
あっちゃんはそう言うと唯をまた抱き抱えた。
「こんな時に悪いんだけど、唯メイク落としたいかも」
「お前ってホント緊張感ないのな」
「今のメイクの崩れ具合はスッピンの１００倍恥ずかしい」
唯がそう言うと、あっちゃんがキレイにメイクを落としてくれた。

「姫、これでよろしいですか？」
「ご苦労様」

単なる風邪かと思ったが疲労と栄養失調と言われた。
病院で１時間の点滴の間もあっちゃんがずっと側にいてくれた。

家に帰ると、あっちゃんがお粥を作ってくれた。
「このご時世、しかもＮｏ．１キャバ嬢が栄養失調って…」
呆れながらあっちゃんが作ってくれたお粥は温かかった。

あっちゃんがいつ帰ったのかわからない。
目を覚ますと枕元にはお水があった。
喉がカラカラで、そのお水を一気に飲み干すと気分がスッキリしているのが分かった。
時計を見ると２３時だった。
あっちゃんが来てくれたのが何時で、病院に行ったのが何時で、あっちゃんが帰ったのが何時なのか、ちっともわからない。
お店行ってみようかな…
起き上がってみるがさすがに無理なようだ。ただ、熱を計ると３８℃まで下がっていた。

それから間もなくあっちゃんからＴＥＬがきた。
「あっちゃん？」「おぅ！少しは良くなったみたいだな」
「うん、ありがとう。でもあんまりよく覚えてなくって…　あっち

ゃん何時に来てくれて何時に帰ったの？」
「行ったのは４時頃かな？帰ったのはさっき、２２時頃」
「えーっ！！そんなに？それはヤバイよぉ」
「何が？」
「だってあっちゃんの１日、唯が潰しちゃったんじゃん！まずいって」
「たまにはいいんじゃん？っていうかあのまま１人でいたら死んでたぞ。あんま無理すんなって」
「ありがとう。ゴメンね。ありがとう。あっちゃんは命の恩人だぁ」
「じゃあさ…　その恩人の言うことたまには一つ聞いてみたら」
「なに？」
「今年の大晦日空けといて。んで、一緒飯食って初詣行こう」
「あっちゃんそれって…　うん、分かった。あっちゃんがどうしてもって言うならいいよ」
わざと意地悪っぽく言った。

それからもあっちゃんがいるお店へ通いながら大晦日が楽しみで仕方なかった。

そして大晦日当日、１９時にあっちゃんが迎えに来る。あっちゃんのお家であっちゃんの手料理をご馳走してもらう。
唯はドキドキして落ち着かなかった。
と、その時携帯が鳴った。あっちゃんからかと思ったが実家のパパからだった。
「お母さんが倒れて、今病院にいるんだけど、かなり危ないらしい。帰って来れないか？」
パパとママは唯が幼い頃離婚していて唯と３つ年上のお兄ちゃんはパパが１人で育ててくれた。離婚の原因は分からないけど、親権を

パパが持つとゆうのはそれなりの理由があったんだと思う。
唯はママとゆう存在にすごく憧れていて、年に2回だけママと会える日は年甲斐もなく甘えていた。
「分かった。すぐ帰るよ」
あっちゃんとの約束…　結局守れなかったな…
唯は初めてあっちゃんにＴＥＬした。
「あっちゃん…　ゴメンナサイ。唯のママが倒れて、かなり危ないみたいなの。それで唯今から実家に帰らなきゃならなくって…　またあっちゃんの言うこと聞けなかったね。ゴメンね」
「そんなのいいから早く行ってあげな。っていうか今家いた？東京駅まで乗せてくよ」
あっちゃんは１０分位で来てくれた。
ママが危ないとゆうショックに加え、あっちゃんに対して申し訳ない気持ちでいっぱいで唯はかなりへコんでいた。
「なんかあったら時間とか気にしないでＴＥＬしてこいよ。」
あっちゃんらしい優しさが心に染みた…。

唯が実家に帰って9日、ママは1度も意識を戻すことなく息を引き取った。

全く関係ないし、そんなのはどうでもいいかもしれないけど、毎日ＴＥＬをくれて、心配してくれたからあっちゃんには連絡しようと思った。
「あっちゃん、ママ死んじゃった」
「お前大丈夫か？」
「意外と平気」
こんな時でも明るく言えてしまう自分が嫌だ。
「無理すんなって。」

あっちゃんは何でもお見通しなのかと思っていたけどそうじゃないみたいで、なんだかホッとした。
今回ばかりは本当に意外と平気だった。
「俺今からそっち行っていいか？」
思いも寄らないセリフ。
「なんで？来てどうすんの？」
「いつも面倒見てやってるお前の母親なんだから、線香だけでもあげさせてよ」
「だから意味分かんないって」
「っていうか、もう向かってるし」
歌舞伎町から唯の実家までは高速に乗って、どんなに飛ばしてもこの時間じゃ5時間は掛かる。

本当に来るのかなぁ。っていうかパパに何て言おう…　あっちゃん仕事帰りだからきっとホストスーツだよねぇ…　どうしよう…

そうこうしてるうちに携帯が鳴った。
「高速どこで降りればいい？」
簡単に実家までの説明をすると、本当にあっちゃんが来てしまうという実感がわいてきた。
「うちのパパにあっちゃんのこと何て言えばいいの？わざわざ東京から、会ったこともない人にお線香あげるためだけに来るなんておかしいよ」
「おかしかろうが何だろうが、とにかく俺に任せろって」

「パパ、友達がねママに会いに来てくれるって。だからちょっと迎えに行って来るね」
あっちゃん無事着いちゃうのかなぁ。

「ププッ」
クラクションの音で振り返るとあっちゃんだった。
「おぅ！」
「本当に来ちゃったんだ…」
「来ちゃったってなんだよ」
「とりあえず寒いからお家入ろ」
唯はあっちゃんを連れてお家へ戻った。

あっちゃんはちゃんとブラックスーツにネクタイをしめて来てくれた。
「お邪魔します」
「どうぞどうぞ」
パパが迎えてくれた。
「初めまして。宮本　篤司といいます。」
あっちゃんはすごくすごくちゃんとしてて、パパも感心してる。
「いつも唯さんには仕事の面で協力して頂いてまして…」

あっちゃんはママにお線香をあげてくれた。

「仕事で美容師をしてますので、差し支えなければおばさんにメイクさせて頂いてもよろしいですか？」
パパは唯に手伝うように言って、快くお願いしてくれた。
あっちゃんがメイクしたママは本当に綺麗だ。
あっちゃん…美容師？

「おじさんも唯さんが心配されてますので、どうかお体大切に」

そう言って帰って行った。
その後唯はパパにあっちゃんの事を色々聞かれたけど、言えないことばかりで作り話に必死になっていた。
唯は四十九日まで実家で過ごした。
東京に戻ると真っ先にあっちゃんに会いたいと思った。
でも唯には崩したくないリズムがある。
まずは仕事に行くことにした。
2ヵ月分稼がなきゃと唯は張り切って飲んで飲んで飲みまくった。
唯のバースデー並みの売上に店長のご機嫌も治ったみたい。

閉店直後、唯はあっちゃんのお店に走った。
「ただいま～！！」
席に着くなり、唯はドンペリを3本入れた。
「飛ばすね～」
「久々だからね」
何よりもあっちゃんに会えたことが嬉しくて、その後も飲んで飲んで飲んで飲んで…　あっちゃんも酔っ払いになってた。
「おい！マジでお前この後空けとけよ！！」
「Ｎｏ．１はお忙しいの」
「じゃあいい！このまま出るぞ！！」
「ちょっと待ってよ」
あっちゃんは唯の手を引いてお店を出た。
いつもならお店を出る時はもう朝だ。でも今日はまだ真っ暗。
「あっちゃんどこ行くの？」
「お前がガンガン飲ませるから予定が狂った」
そのまま唯たちはちょっぴり寒くてすっごく気持ちいい夜風に当たりながら近くの公園まで歩いた。
ベンチに腰掛けると急に寒くなってきた。
するとあっちゃんが唯の肩を抱き寄せた。
「どうしたの？あっちゃん酔っ払い？」

あっちゃんにドキドキがバレないように、慎重に慎重に言葉を発した。
「そろそろさぁ…　ちゃんとしない？」
「なにが？」
あっちゃんはいつも通り。唯は声が震えて上手く喋れない。
「お前さぁ、まだ一番のお客目指してんの？」
「当たり前じゃん！その為に帰って来たようなもんだよ」
「そっかぁ。でもそれだと困るんだよね。俺そんなつもりないし」
「…」
「お前は、ホストとしての俺がいいわけ？」
「…」
「俺は普通に付き合いたいと思ってる」
「…」
「シカトしすぎ」
「…」
「お前が俺のことホストとしてしか見れないって言うなら今のままでいいよ。でも俺はお前のことただの客としては見れないから」
「…　唯ね、あっちゃんのことすっごい好き。大好き。ホストとしてだけじゃなくって…　だけどそれはあっちゃんを困らせることになるからずっと黙ってた。今のままで十分楽しいから言わないでおこうって思ってたのに…」
話の途中であっちゃんに抱きしめられ、あっちゃんの心臓のドキドキが唯の胸に伝わってきた。
「俺はお前の全部受け止められるから、安心しろ」

お店に戻ると唯がいたテーブルにはまだボトルが置いたままだった。
「っていうか、こんな寒い中連れ回してＮｏ．１が風邪でもひいたらどうすんのよ」
恥ずかしいのと気まずいのとで、憎まれ口しか思い浮かばない。

「そしたらまた看病してやっから」
あっちゃんはそんなかっこいいセリフをサラッと言ってのける。
「こんな寒い中、お2人さんはどこに行ってたのかなぁ？」
光くんが興味津津で聞くとあっちゃんは一杯も飲まないうちに席を離れていった。
「愛を育んできたんだよ」
唯が冗談っぽく言うと離れた席であっちゃんが反応してるのが分かった。
「唯ちゃんはすぐはぐらかすからなぁ。後で篤司さんに聞こっと」
あっちゃんが戻って来ると光くんが待ってましたと言わんばかりにあっちゃんに食い付いた。
「篤司さん、今日終わってからご飯行きません？」
「悪い、先約あんだわ」
あっちゃんはそう言いながら唯を指差している。
「唯、約束したっけ？」
「今日ぐらい付き合えって」
「なになに～？わけアリ？」
「俺、コイツと付き合うことにしたから」
まさかあっちゃんの口からそんな言葉が出るとは思っていなかった唯と光くんは目を丸くした。

「マジでー？！俺唯ちゃん狙ってたのに！！」「唯、付き合うなんてひとことも言ってないよ」
「いや、お前に決定権ないし」
「ちょっと待った！2人の話聞いてるとどこまでが本気かわかんないんっすけど」
「とにかく、俺はコイツと付き合うことにしたから、光は諦めろ」
「あっちゃん別に唯のこと特別好きってわけじゃないでしょ？そんな人とは付き合えないよ」
唯はここまできてもまだ強がって見せた。

「俺だって好きでもない女と付き合うほど暇じゃないし」
「あの～、俺はいつまで2人ののろけ話聞いてればいいんっすかねぇ？」
「　…　」
「話は後でな。ラストまでいろよ」

お店を出てあっちゃんの車に乗ると、１０分も走らないうちに、立派なマンションの駐車場に入っていった。
「ここって…　もしかして…」
「俺ん家」
「えーっ！？そこそこのホストでもこんないいとこ住めるんだぁ」
「そこそこじゃねぇよ。落ち目だよ」
「そっか！」
唯はだいぶはしゃいでいた。でもそれ以上にあっちゃんもはしゃいでいた…。

男の一人暮らしとは思えないくらいにキレイに片付いた広い部屋。あっちゃんが暮らす１７Ｆから見る景色は都会ならではの迫力がある。
「いいないいな。唯もこんなとこに住みた～い！！」
「一緒住む？」
あっちゃんはいつも通りで余裕があって…　でも唯はあっちゃんに優しくされればされるほど、どんどん不安になってく。
「もぉやだ。どこまで信じていいのかわかんないよ」
唯は泣きそうになって必死に涙をこらえた。
「お前ホント何もわかってないのな。俺今までお前に嘘ついたことねぇぞ。本音言わないのはお前の方じゃん」
「強がんなくていいし我慢しなくていいから。全部受け止めるって

言ったっしょ」
「あ～ぁ、こんなつもりじゃなかったのにな。これじゃ恋する乙女じゃん」
唯の瞳から涙がこぼれ落ちていた。
「これから先泣くことなんてないだろうから今のうち好きなだけ泣いとけ。そんで終わったら飯食うぞ」
「…なんかもういいや。面倒くなってきたから泣くのやめとくわ」
「面倒いんじゃなくって腹減ったんだろ」
あっちゃんは唯を1番元気にする方法を知ってる。甘い言葉なんかよりふざけ合ってる方が唯はずっと好き。あっちゃんがあっちゃんらしくいてくれる気がして唯はそんなあっちゃんを見てるのが1番好き。

ご飯を食べた後あっちゃんは仕事に出掛けた。
「18時頃に帰るから適当にやっててて」
とりあえずシャワーを浴びて、ふと我に帰るとなんだか幸せすぎて怖くなった。あれこれ考えるのは性に合わない。だから寝ることにした。

目を覚ますと、唯が寝てるソファに寄り掛かってテレビを見てる人がいる。
「…アレ？」
「アレ？じゃないし寝過ぎだし」
時計を見ると19時を回っていた。唯はあっちゃんが帰ったのにも気付かず寝てたらしい。
「ホント緊張感とは無縁だな」
「っていうか仕事行かなきゃ！っていうか今から行っても遅刻だし

…」
「あっちゃん寝るでしょ？唯帰るね」
「なんで？」
「あっちゃんとこ行くのに昨日と一緒の服は気まずい…」
「まだ来るの？もういいじゃん。俺とだったらいつでも会えるし」
「なんかいいね。彼女っぽい」
「いちいち感動すんな。」

結局は服を買ってから仕事に行くことにした。あっちゃんは不服そう。
「素直じゃないね。一緒にいたいって言えば考えてあげてもいいのに」
「死んでも言わねー」
唯は遅刻してるのにご機嫌で出勤した。
仕事が終わるとあっちゃんから着信があった。
「もう来るなとか言っといてなんなんだけど…」
「わかった、寝坊したんでしょ？いいよ同伴で」
唯とあっちゃんがお店に入ると光くんがテーブルをセットして待ち構えている。
「で、篤司さんと唯ちゃんは熱い夜を過ごしたってわけっすか？」
「なにが？」
唯とあっちゃんは声を揃えて言った。
「初夜は激しかったんだろうなぁ」
「…そっか　忘れてた。っつうか一緒寝てねぇし！！」
「うっわぁ…　歌舞伎町一のイケメンホストと歌舞伎町Ｎｏ．１キャバ嬢の純愛ってなんか寒くないっすか？」
「うっせーよ」
「でも良かったですね。篤司さん、唯ちゃんにヒトメボレでしたもんね」
「おい！光余計なこと言ってんじゃねぇ！！」

「へぇ～、そうなんだぁ～。ふぅ～ん。」
唯は得意気だ。
「あー、もういいから！光、今日はコイツの卒業だ。ピンク持ってこい」
「篤司さんから歌舞伎町のマドンナ唯さんにピンドン入りま～す！！」

あっちゃんは一緒に暮らそうって言ってくれたけど、唯は断った。
あっちゃんと一緒に暮らしてしまったら唯はあっちゃんの生活を壊してしまうと思った。

それから2ヵ月…
春の陽射しが気持ちいい季節になった。
唯は学校に行って、仕事に行って、以前と変わらない生活を送っていた。一つ変わったのは仕事を週4日に減らしてあっちゃんのお家に行くようになったこと。
「ただいま」
「おかえり～」
「あっちゃんの好きな和風ハンバーグにしたよ」
あっちゃんは唯のご飯をいつも美味しいって言って食べてくれる。
「お前の飯マジ美味いわ。長生き出来そう」
「唯、おばあちゃんになっても作るのぉ？」
「お前の飯食わねぇと長生き出来ないからな」
相変わらずこんなやりとりをしている。
でも、初めての夜はあっちゃんは唯を優しく抱きながら、一生俺と一緒にいろ、そんで一緒に幸せになろうって言ってくれた。

あっちゃんが仕事に出掛けるのと一緒に、唯はお家に帰る。
唯は幸せの絶頂だった。でもなぜか今夜はまっすぐ帰る気になれなくて、歌舞伎町をブラブラしていた。

ホストのキャッチがウロウロしている。
やっぱあっちゃんよりカッコイイ人はいないな。優越感に浸りながら1人歩いていると2人組のホストが声を掛けて来た。
「1人？飲み行かない？」
もちろん断るつもりで顔を上げると、どストライクのイケメンくんがいた。
あっちゃんに悪いとは思ったけど、このチャンスを逃すわけにはいかないと、即OKでついて行った。

彼の名前は涼くん。あっちゃんよりもずっとやんちゃな感じが妙に可愛い。
涼くんが働くお店は、歌舞伎町でも5本の指に入る、超有名店だった。
「唯はホスト初めて？」
「ホストは初めてじゃないけど涼くん程のイケメンホストは初めてかも」
調子良過ぎる自分に吹き出しそうになる。
「唯、ホント可愛いわ～」
あっちゃんに今まで名前を呼ばれたことがない。だから涼くんが呼んでくれることにドキドキして嬉しかった。
「今日アフター行かね？」
「じゃあ涼くんお任せコースで」

ラストまで飲みまくった後、ホストがお客を引っ張る為に誘うアフターに涼くんと行った。涼くんのアフターコースはホテルに直行だった。
あっちゃんに対しての後ろめたさもあったけど、あっちゃんとは違ってお客慣れしてない涼くんが、唯とどんな関係を作るのか、そっちへの興味の方が勝ってしまった。

部屋に向かうエレベーターで、
涼くんは既に完全なオスになっていた。涼くんの熱いキスが、唯の理性を消し去っていた。
あっちゃんの優しい抱き方とは違って、涼くんは激しく求めてくる。
ここには愛なんてものは欠片もない。それでもお互いを求めていた。

それからも唯と涼くんの体だけの関係は続いた。
あっちゃんのことは変わらず好き。
でも涼くんとの間にも体だけではなく、何らかの気持ちが芽生えていた。

涼くんとの関係が始まってから1ヵ月。唯は変わらずあっちゃんを愛しながらも涼くんへの確かな気持ちにも気付いていた。
涼くんからいつもの時間のＴＥＬ。唯はいつも通り出る。
「おはよっ」
「唯…　もう終わりにしよう。唯は俺がいなくても生きてけるだろ？」
それだけ言うとＴＥＬは切れた。突然の別れの言葉…　唯は止めどなく溢れる涙にただ呆然としていた。

やだよ、やだよ。何かの間違いだよね？
すると、また携帯が鳴った。
涼くんっ！！
そう思って携帯を見ると、最悪のタイミングであっちゃんからだった。
「何お前泣いてんの？」
唯が何もためらわずに出ると、あっちゃんは驚いている。
「フラれたぁー！！」
唯は立場も考えずにあっちゃんに泣き付いた。
「お前さぁ、そうやって浮気なんかしてっから罰当たんじゃん。だから俺にしとけって」
あっちゃんはこれっぽっちも怒らなかった。怒るよりも先に唯を元気にする言葉を探してくれた。

「俺が３０になった時まだお前が売れ残ってたら、俺がもらってやるから」
あっちゃんは最近口癖のように言う。
あっちゃんはちょっと変わった。前は結婚とか将来とかそんな話をすることはなかった。
「唯２８じゃん！ヤダよ。もっと早く結婚して子沢山家族作るんだもん」
毎日本当に穏やかであったかくて、こんな日がずっと続くと思ってた。

「もうすぐあっちゃんのお誕生日だね。プレゼント何がいい？」
「んー、お前がなんか適当に選んで」

そしてお誕生日当日、唯はお仕事前にプレゼントを買いに行った。
初めから決めていた唯は、あっちゃんが最近お気に入りのブランドショップに向かった。

仕事のあとにあっちゃんに内緒でお店に行くつもり。
驚くだろうなぁ。
唯はワクワクしていた。
でも最初に驚いたのは唯の方だった。
仕事中、接客の合間に携帯を覗くとなんと涼くんからの着信があった。
唯の心臓が大きく音を立てた。
なんで今さら…
するとまた携帯に涼くんからの着信が…
「はい」
「あっ、唯？久し振り～。元気か？」
「元気だよ。涼くんは？」
「俺も。また遊ぼうよ」
唯は今あっちゃんとすごく幸せな毎日を送ってるし、涼くんは唯と恋愛する気がないのも分かってる。
「そだね。また連絡して」
なんでこんなことを言ってしまったのか、自分でもわからない。
でも今日はあっちゃんのお誕生日だ～！！
気持ちの切替えは誰よりも早い。

仕事が終わるとあっちゃんのお店へ直行した。
「うわっ！！」
あっちゃんは予想通りのリアクションをしてくれた。
「あっちゃんのお誕生日のお祝いに来たよ」
「唯ちゃ～ん！久し振り～！！」
光くんが駆け寄ってきた。
席に案内されて、久々にホストクラブに来た実感が沸いて来た。
「光くん、とりあえず一発目は泡もので」唯はご機嫌でピンドンを

入れた。
「おいおい、何勝手にやってんだよ」
「いいのいいの。ずっと来てなかったから、お金ならたっぷりあるし」
３本目のドンペリ、ゴールドと共に唯はあっちゃんにプレゼントを渡した。
「マジで？！これはヤバくない？」
「カッコイイでしょ？付けてみて」
唯があっちゃんに贈ったのは腕時計。唯とあっちゃんは一緒にいれる時間が短いから、いつでも身に付けておけるものが良かった。
「どう？」
「最ッ高！！」
そう言って唯の頭を撫でてくれた。
唯とあっちゃんが付き合っていることは、光くんしか知らない。だから他のホストからすればただの貢ぎ物にしか見えないと思う。だからこそ奮発した。
「唯ちゃんお誕生日いつ？」
「１０月！あっちゃん、覚えてたらお祝いしてね」

あっちゃんは唯があげた時計をとっても大切にしてくれてる。
そんな姿が本当に愛しい。
なのに唯は、また涼くんと関係を持ってしまった。

その日は初めて涼くんのお家に呼ばれた。
「適当に座って」
あっちゃんのオシャレな部屋とは違って、本当に必要な物しかない殺風景な部屋。
そんな部屋には似合わないぬいぐるみやキャラクターもののティッ

シュカバーがある。そしてテレビには女の子とのプリクラが貼ってあった。正直、勝ってると思う。だから敢えて聞いた。
「この子彼女？」涼くんははぐらかしたけど、間違いない。でも唯には責める資格はない。
わかってはいたけど体だけの関係がまた続くんだと、改めて思い知らされた。
それでも、ゆいは涼くんと会うのをやめようとはしなかった。

涼くんのお家で会うようになってから6回目。
その日はこの夏一番の暑さだった。
「涼くん、何か飲み物もらっていい？」
「冷蔵庫から好きなの取って」
そう言われて冷蔵庫を開けると…
全く無縁の中で生活してきた唯でもわかる。クスリを打つ時の注射器があった。
「涼くん…　これ…　」
唯は手が震えた。
「あぁ、唯もやる？」
やるわけない。
そっか、涼くんはそうゆう環境で生活してきたんだ。
「涼くん唯に1人でも生きてけるだろ？って言ったよね？じゃあなんで戻ってきたの？体？お金？」
「俺さぁぶっちゃけ、3年付き合ってる彼女いるんだ。あの時は唯とのことバレてヤバかったけど、俺やっぱ唯がいないとダメだ」
そう言って唯の首元にキスをした。結局そのまま今日も涼くんに抱かれた。

あっちゃんのお誕生日から2ヵ月、唯のお誕生日は1週間後。あっちゃんは思いっ切りハードル上げて楽しみにしててていいよって、笑

ってた。本当に本当に楽しみだった。

そしてお誕生日当日、唯はあっちゃんからのＴＥＬをワクワクしながら待っていた。すると…　涼くんからの着信。

「唯、今日誕生日だろ？家来いよ」

「今日は彼氏がお祝いしてくれてるから…」

その突き放すような言葉に涼くんはイラついた様子だった。

「今唯の部屋の前にいた。唯がその彼氏を選ぶんなら俺はこのまま帰る。でも少しでも俺に望みがあるなら一緒に俺ん家行こう。」

行くわけない。唯はあっちゃんにお祝いしてもらうのすごい楽しみで、その上涼くんよりかずっとずっとあっちゃんが大好きだ。

なのに玄関のドアを開けてしまった。

「じゃあ、行こっか」

唯は黙って付いて行く。バッグの中ではあっちゃんからの着信を知らせる携帯がずっと鳴り続けていた。

唯は今も涼くんに抱かれている。

あっちゃんからは１ヵ月経った今でも毎日ＴＥＬが来る。１度も出ていない。

涼くんは彼女とは別れない。結局は彼女が１番で、涼くんのお誕生日も唯にはお祝いさせてくれなかった。あの日どうして涼くんを選んでしまったのか…

今でもあっちゃんに会いたいと、あっちゃんのとこに戻りたいと思う。だけど罪悪感でいっぱいであっちゃんのＴＥＬに出ることは出来なかった。

お誕生日だけじゃない。X'ｍａｓも、大晦日もバレンタインも、
涼くんが唯と過ごしてくれたイベントは何一つない。
それでも唯は涼くんから離れることが出来なかった。
１人になりたくなかった…

時間が経てば経つ程、唯はあっちゃんを裏切ってしまった後悔に押し潰されそうだった。
そしてどんどんクスリに蝕まれ、もともと普通じゃない時は連絡をして来ない涼くんからの連絡は次第に少なくなっていた。

結局唯は１人になるんだ…

唯があっちゃんの元を離れて１年半が経った頃、唯が働くお店に１人の懐かしい顔が現われた。
光くんだった。
「唯ちゃん、篤司さん今入院してるんだ。いつ退院出来るかわからない。１度でいいから病院に行ってくれないか？」
光くんが何を言っているのかがわからない。
「唯ちゃん？聞いてる？」
「なんで？どうして？あっちゃんは何も悪くない。悪いのは唯なのにどうしてあっちゃんがそんな…」
急性白血病で、長い間我慢していたあっちゃんの体はもう限界で、先は長くないとのことだった。
唯は泣くことしか出来なかった。
「唯ちゃん、今から一緒に病院行こう」
「唯は行けないよ…　唯はあっちゃんを傷付け過ぎた…」
「でも篤司さんは唯ちゃんに会いたがってるよ」
あっちゃんに会わせる顔がない。

光くんは毎日唯を誘ってくれた。なかなか決心のつかない唯があっちゃんに会いに行ったのはそれから3週間後だった。
「おぅ…　久し振りじゃん」
あっちゃんは笑顔を見せてくれたが、その言葉に力はない。見るからにやせ細った左腕には、サイズの合わなくなった腕時計が付けられていた。
「あっちゃん…　ごめんね…　本当にごめんなさい」
「隣りに俺がいなくてもお前が幸せならそれでいいと思ったんだけど全然幸せそうじゃねぇじゃん。」
「あっちゃん、まだ間に合うかな？まだ唯はあっちゃんのこと幸せに出来るかな？」
「俺は今すっげぇ幸せ。お前の顔が見れて…」

光くんの話では、あっちゃんは1年くらい前から体調不良で仕事を休む日が多くなっていたらしい。ただの疲労だと思ってたのが、お店で倒れて病院に運ばれ、初めて病気を知ったという。
唯は何も知らずにあっちゃんを振り回して、平気な顔していた…

「ごめんな…　お前のこともらってやるなんて言ってたけど無理かもしんねぇ」
あっちゃんは昨日より今日、今日より明日…とどんどん弱っていく。
「唯があっちゃんのこともらってあげるよ」
唯は2人だけの幸せだった時間を思い出して、あの頃のように元気に言った。「結局、俺はお前のこと泣かせてばっかだな」
「あっちゃん…　唯、本当に最低だけど、あっちゃんがいてくれてホントに幸せだよ…　だから、だから…」
唯にもお返しさせてよ…　必ずあっちゃんを幸せにするから…　だからお願い…　あっちゃん、死なないで…

それから2ヵ月…
あっちゃんは1度も退院することなく、眠るように逝ってしまった。
「唯、ごめんな…　幸せになれよ。光、唯を頼むな…」
最期にあっちゃんは名前を呼んでくれた。
「光くん、唯はあっちゃんに何もしてあげられなかった。
なんで？なんであっちゃんが死んじゃうの？
やだよ、やだよ…」
「唯ちゃん…」
「唯、あっちゃんに甘えてた。
あっちゃんなら唯がどこで何しててても、必ず許して受け入れてくれるって思ってた。
もうあっちゃんを独りぼっちに出来ないよ。唯もあっちゃんのとこに行かなきゃ…」
「唯ちゃん、篤司さんは心の底から唯ちゃんの幸せを願ってたよ。
唯ちゃんの幸せが篤司さんの幸せなんだから、唯ちゃんは篤司さんの分も幸せにならなきゃ」

あれから5年…
唯は光くんと結婚した。光くんが唯にくれた婚約指輪は、あの日、あっちゃんと迎えるはずだった唯の２０歳のお誕生日にあっちゃんが唯にプレゼントしようとしていた指輪だった。
結婚式では、あっちゃんが死の直前に動かなくなった手で一生懸命書いてくれた手紙を光くんが読んでくれた。
「唯へ
結婚おめでとう。
本当は俺がお前の隣にいて、お前を世界一幸せな花嫁にしてやりた

かった。お前は笑うだろうけど、それが俺の夢だった。お前はわがままで気分屋でホント振り回されっぱなしだったけど、人一倍頑張り屋で明るくていつも元気で、そんなお前が俺は本当に大好きだった。
光はお前と一緒で、明るくていつも元気で人を思いやれる本当にいいヤツだ。お前と光なら毎日笑って暮らせる明るい家庭を築けると思う。お前には俺と光がついてるから、絶対俺と光がお前を守るから、だからまっすぐ俺らについて来てくれ。もう隣りでお前のことを受け止めることは出来ないけど、その分光がお前を受け止めてくれるから、だから絶対一生笑ってろよ。
篤司」
涙を堪えながらあっちゃんからの手紙を読み終えた光くんは、唯の手を握り…
「俺じゃ役不足かもしれないけど、篤司さんの夢を受け継いで必ず幸せにするよ。俺らには篤司さんがついてるから、きっと大丈夫」
あんなに愛して、傷付けて…
そして愛されて、守られて…
「あっちゃん、唯はあっちゃんと出会ってからずっと幸せだよ。本当にありがとう。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1381d/

プレゼント

2010年11月18日09時33分発行